



中国幻想建築コレクション (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011241

どのような姿をしていたのかは杳としてわからない。走馬灯のように現われては消えるいくつかの庭園のイメージの中で、最も美しくかつ具体的なのはもちろん董説の夢で、建物も内部の調度もすべて石造りの建物、モノトーンの世界に^{エメラルドグリーン}碧緑の篆書で書かれた匾額など、董説の卓抜な記憶力がうつろいやすい「志」をみごとにとらえた一段と言えよう。

『泌園集』巻二十一に収められている。ただ『明史』を見ると、「人と為りは貪狡にして行無し」とか、会試で不正を行ったとか、評判はよくない。

(17) この夢は董説が一番気に入っていた夢で、たびたび思い出しては詩に詠じている。たとえば一六五三年の詩、「^{こしょう}童を買いて如夢と名づく」に、「寒峰七十二、余昔夢にこれを見る。篆牌 石緑凝り、七字新詩を^ほ翦る」、その自注に「数年前、夢に石楼に至る。石楼に七字の篆牌有りて云う、七十二峰 暁寒生ず」とあるのがそれである。

(18) 桃花源図 陶淵明の「桃花源記」を絵画にしたものであろう。

(19) 薬草採集 董説の文章に「夢本草」(豊草庵前集巻三)があり、「夢の味は甘く性は醇、毒無し、神智を^{ふや}益し、血脈を^{のび}鬯やかにし、煩滞を^{ひら}鬯き、心を清くし俗より遠ざけ、人をして長寿ならしむ」とあるので、夢の採集を言うのであろう。

(20) 呉愍僧巖居読書図 『方輿勝覽』巻二平江府呉県の条にこうある。「愍愍泉は呉郡宝華山寺の東に在り、極めて清冽なり。相伝う、得道の僧名は愍愍なる者、^{しゃくじょう}錫をまっすぐ卓^たてて出す所と為る」この僧の事跡を絵画にしたもの。

(21) 沈石田先生 沈周、字は啓南、号は石田。詩文、書及び絵画にすぐれた才能を発揮した。

(22) この詩は沈周の『石田詩選』(四庫全書本)には未収。現在調査中。

跋

もうおわかりと思うが、この志園は第四のタイプに属する。まず一晩に夢が三回も変化することから、「志」(意志とイメージの両義を兼ねる)をはっきりとらえることがいかに困難かを述べ、次に虞聖民が志園記を依頼してきたことに言及、志園の先例としての神楼と、それを記念した詩文を列挙する。ついで過去の夢から石造りの楼台の夢を選んで、それが自らの志園だと宣言、虞聖民の志園が二回も変わったと述べ、最後に家蔵の沈石田の絵画をもう一つの志園に見立て、志園記をしめくくる。つまりこの志園記は人それぞれが持つ庭園のイメージの変転の記録であって、虞聖民が構想していた庭園が

ら其の上に題し、毎に其の中に遊ぶと謂う。先生此に於いて意有らんか。ともに一笑し詩を賦してこれに系く、時に先生年七十有二、徵明もまた七十六なり」という長い題の詩が有る。詩に曰く、「仙人 謾りに説う楼居を好むと、咫尺の丹青もまた娛しむべし。坐して黄庭を守りて幽闕廻かに、真誥を読み残して夜窓虚し。心を物表に遊ばせて地無きを疑い、迹を空中に寄せて余有るを楽しむ。一笑すれば闌干倚るをなさず、浮雲 奄忽く 渺たること何如」。

(14) 朱子曰藩 字は子价、宝応の人。嘉靖二十三年進士。烏程の知県となった時、峴山に引退した劉麟と詩社を作り応酬した。最終官は九江知府。その著書『山帯閣集』には「神楼曲」は見当たらず、かわりに、「大司空南坦劉公楼居を好むも楼未だ成らず、翰待詔衡山文丈為に一樓を図き、系くるに詩を以てしてこれに贈る。司空公出して以て門下の客に示し、各の一詩を賦せしむ。且つ必ずしも次韻せざるを約す。成字を用う」というこれも長い題の詩が入っている。詩に曰く、「華陽 楼に登りて復た下らず、司空これを慕うも未だ成らず。招隠 謾りに説う結構無しと、臥游 還お擬す高明に居るに。浮雲 西北 帝郷遠く、碧海 三五仙人迎う。心に期す咫尺九垓の上、肯えて人間に向いて路を借りて行かん」（原注 沈約に「陶先生楼に登りて復た下らず」の詩有り）。

(15) 楊用修 名は慎、字は用修、号は升庵、正徳六年の 状元^{だいちばん}。翰林修撰となり、嘉靖朝に経筵講官に充てられた。後直諫により、二度宮廷で杖刑を受けた。雲南に流され、発憤読書し、博学の士となった。朱曰藩は年下の友人。その著書『升庵集』巻二十四に、「後神楼曲 序有り」という詩題の古詩があり、その序には「司空南坦劉公元瑞、陶貞白の茅山に楼居して足地を履まずの事を慕うも、未だ楼を構てざるなり。待詔文衡山、為に楼居図を絵き、神をしてここに栖ましむ。射陂の朱子曰藩神楼曲を作り、余其の意を櫟括し、後神楼曲を為る」とあって、董説は楊慎の序を見てこの前後を書いているのは明らかである。なお文中の「仙家五城十二楼」は、『升庵集』では「吾れ聞く 仙家五城十二楼」となっている。

(16) 吾が家の故太史公 董説の曾祖父董份を指す。嘉靖二十年進士、官は礼部尚書に至り、翰林学士を兼ねた。「大司空南坦神楼序」はその著

遠の「廬山記」(『全晋文』卷一百六十二)「天將に雨ふらんとするや、白氣の先ず搏る有りて山嶺下に纓絡す」にもとづく。

(8) 人間可哀曲 董説の著書『豊草庵詩集』卷一の冒頭は「人間可哀曲」で、「君が為に玉笛を吹き、長に招魂の篇を詠ぜん」と、鉄笛ならぬ玉笛が登場する。

(9) 一晚に三回も変化する 蘇軾の次のような言葉が連想される。「人に羊を牧して寝る者有り、羊に因りて馬を念い、馬に因りて車を念い、車に因りて蓋を念い、ついに曲蓋鼓吹を夢にみて、身は王公と為る」(中華書局『蘇軾文集』卷十九に収める夢齋銘並びに序) 夢の中で連想の力が働き、次々に映像が変わると蘇軾は主張する。

(10) 静嘯齋 董説の父親の齋号であり、その文集を『静嘯齋遺文』という。董説は父親の死後も父の書齋と齋号を使い続けた。

(11) 司空の南坦劉公 司空は工部尚書(土木担当大臣)の古名。南坦劉公は明の人劉麟を指す。字は元瑞、弘治九年進士。嘉靖年間累進して工部尚書となり、宮廷費用の節約に努めたが、誹謗中傷に会い一年余りで辞職した。『明史』劉麟伝に云う、「晩楼居を好むも、力にかぎりあり構ること能わず、籃輿を梁に懸け、其の中に曲臥し、名づけて神楼と曰う。文徵明図を絵きてこれに遺る。」それにしても明朝の高官であった劉麟が、晩年に至ってかごを天井につるし、その中に体を屈曲させて入っていた、というのは奇談中の奇談である。

(12) 楼居 『史記』武帝紀に次のような話がのっている。武帝が仙人を招来できるかと方士に質問し、それに対して方士はこう答えた、「仙人は見るべし。…今陛下観を為るべし。緱氏の城の如くにし、脯と棗を置かば、神人よろしく致くべし。且つ仙人は楼居を好めり」つまり楼居とは背の高い建物に住むことである。

(13) 待詔文衡山 明代の著名な画家文徵明を指す。名は璧、字は徵明、号は衡山居士。翰林院待詔となったのでこう呼ばれる。『文徵明集』(上海古籍出版社刊)卷八に、「南坦先生既に司空の務を解かれ、呉興山中に退隠し、晩に養生を托し自ら寄す。楼居を為さんと欲するも力暇あらざる所有り。徵明為に溪山楼観図を書き以て贈る。昔米元章研山図を作り、自

注釈

(1) 達士 『呂氏春秋』知分に、「達士は、死生の分に達すれば、利害存亡も惑わすこと能わざるなり」とあり、何者にも左右されぬ判断力を持つ人を「達士」と呼ぶ。また『後漢書』仲長統伝に、自作の詩をのせて、「至人は能く変じ、達士はじだいをちようえつ拔俗す」とあるのによれば、脱俗風狂の人物をも指す。

(2) 夢郷 夢郷は夢が住む架空の国である。一六四三年に書かれた「夢郷志」によると、夢郷は幻想的な夢が住む玄怪郷、幽玄な自然がテーマの夢が住む山水郷、靈魂が肉体から離れて見た夢が住む冥郷、感情が城郭などを造形した夢が住む識郷、欲望が思いのままに実現した夢が如意郷、過去の出来事が再現された夢が住む蔵往郷、未来を予知する夢が住む未来郷の七つの地域に分かれ、夢郷を統治するための官僚機構や法律が整備されている。『颯風』三十五号所収「董説の見た夢の記録（三）」を参照。

(3) 苦海 俗に「苦海無辺」と言うように、この世の際限ない煩惱を海にたとえる。用例としては、『法華経寿量品』の「我れもろもろ諸の衆生の苦海しづに没むを見る」などがある。

(4) 霊台 『莊子』庚桑楚篇に「是の若くにして万悪至る者は、皆天うんめいにして人じんいに非ざるなり。以て成やすらぎを滑みだすに足らず、霊台いに内るべからず」にもとづく表現で、「心」を意味する。「台」に引っかけてそこに「登る」と言ったのである。

(5) 旃檀 釈迦が涅槃に入った後荼毘に付された時に燃やされた香木で、ここでは涅槃の境地を指す。

(6) 夢郷志 同じ年に董説は夢日記『昭陽夢志』を書いているので、同一の書物を二つの名で呼んでいるのかもしれない。例として『昭陽夢志』九月九日の記事を挙げておく。「まったく雲一つない青空から、突然一万本の乳房が垂れて来て、徐々に伸びて屋根瓦に達した。乳房の色は赤と青であった。」『女子大文学』国文篇四十六号所収「董説の見た夢の記録（一）」を参照。

(7) 慧遠 東晋の高僧（三三四～四一六）、廬山に入り、浄土宗の祖となった。なお直前の記述「山腹を見ると霧雨がからみついており」は、慧

まいな風説を圧殺し、司空の神楼は今に至るまで天地の間にそびえ立っている。聖民の志園もまた司空の神楼なのだ。しかし聖民よ、少し待ってくれ、私ももうすぐ夢楼を建てようと思っているのだ。」

最近私は苕溪〔呉興を通る川〕沿いに旅行中こんな夢を見た⁽¹⁷⁾。雨の中竹藪を突っきるうちに、突如として門のように立つ二つの山に出会った。私はその門から入って松並木を十里行ったところで遂に石造りの楼閣に登った。楼閣の中の卓子・椅子・窓・扉はすべて石造りだった。楼閣の上には石造りの匾額があり、飛翔する鳳凰のようなスタイルで、碧緑の篆書七文字「七十二峰 暁寒生ず」とあった。今私は何をしても「暁寒」から心が離れない。私の夢楼が出来上がったらあなたの志園とあわせて記念の文章を書こうと聖民に言ったのだった。

それから二年がたち、丁亥（順治四年一六四七年）に聖民が前の約束を果たしてくれと言ってきた。「私は最近桃花源図⁽¹⁸⁾を手に入れた。名画でね、私はこれを志園にしようと思う。」私の答え。「わかった、でも今は薬草採集⁽¹⁹⁾に忙しくてね。」

さらに二年がたち、聖民が一枚の紙を持ってやって来て言った。「私の志園はまた変わった。これは呉憨僧巖居読書図⁽²⁰⁾だ。これを志園にしようと思うのだが、君その記念の文章を書いてくれ。」私は笑いながら、「だから志園記を書くのはむずかしいと言っているのだ。意志は夢みtainなもの、イメージする谷や山が時によって異なるのだから、この庭園の図がどうして描けよう。図を手にして意志を説明しようとしてもかみあ^{ためし}った例がない。さらに聖民が未来に構想する庭のすべてが、現在の庭より劣っているなどと誰が言えようか。とは言うものの、志園記を書く価値は十分ある。

私の家には沈石田先生⁽²¹⁾の黄茅亭子一幅があり、蒼然とした藤の古木と、坐って滝を見ている人が描かれていて、先生は次の一首を書きつけている⁽²²⁾。「黄茅の亭子 澗溪の辺、山色 微陽 遠く天に映ず。中坐 読書 人未だ了らず、雲を見て厭かず鳴泉を聴くに」私はこの画軸をととても大切にしている。これもまた私の志園なのだ。

夢郷志⁽⁶⁾を書き、ただちに版木にほらせた。ある日の夕方、小楼^{ざしき}の周辺に降っていた雪は晴れ、清らかな夜気に包まれていた。と、突然夢の中で雲の棧道を通り、古代のいわゆる霜台〔官吏の弾劾を司る御史台の別称〕に登った。そこから下を見下ろすと、青梅の花が咲き乱れる林があり、花は緑色の羽のようだった。次の夢では廬山にいた。第三嶺に到達したところ、そこはとても急峻で、山腹を見ると霧雨がからみついており、慧遠⁽⁷⁾の言葉の通りだった。一番鶏が鳴いたあたりでまた夢を見た。私は釣り舟に乗って、鉄の笛で「人間可哀之曲」⁽⁸⁾を演奏した。上を見ると数人の鹿に乗った仙人が霞たなびくあたりからやって来た。目を覚まして大いに後悔し、夢郷の様子を記録するなど不可能だと悟った。なぜなら一晩に三回も変化する⁽⁹⁾からだ。私はただちに版木をこわした。

その翌年（甲申崇禎十七年順治元年一六四四年）、湖上の虞聖民〔董説の友人であるということ以外は不明〕が静嘯齋⁽¹⁰⁾に滞在、子供たちに孔孟の書を講じてもらった。彼は私に言った、「私はあまりにも早い世の中の移り変わりを悲しむ。貧しいので志園をこしらえようと思うのだが、君、志園の記を書いてくれないか。」私は言った、「わかった。ところで志園とはどんなものか。」聖民は言う、「私の庭園は作ろうという意志しかないので、志園と名付けたのだ。山の麓に家を建て、竹や樹をめぐらし、目の前には清流がながれているのだ。」そこで志園の図を出してくれたが、その言葉通りだった。私は言った、「なんと不思議な！これは私が提唱する夢郷そのものだ。昔司空の南坦劉公⁽¹¹⁾は楼居⁽¹²⁾にあこがれていたが、貧しくて楼を構えることができなかった。待詔文衡山⁽¹³⁾は言った、「私はあなたのためにこの楼を完成させてあげましょう」楼を描いて公に贈り、公は喜んで神楼と命名した。そこで射陂〔朱曰藩の原籍宝応を指す〕の朱子曰藩⁽¹⁴⁾は「神楼曲」を作り、楊用修慎⁽¹⁵⁾も「後神楼曲」を作り、その中に「仙家 五城十二楼、樊桐 方丈 瀛洲を繞る。長風舟を引くも到るべからず、環中の根像 空しく神遊す」という句があった。吾が家の故太史公董份⁽¹⁶⁾も司空のために神楼序を書き、次のように言っている、「公は早くから卓越した功績をあげたが、軽薄な出處進退は、功成った後にもなかったし、その精神は遥か雲の上にあった。」（曾祖父の文章は）完全に聖賢の学説に基づき、（神楼についてささやかれている）あい

中国幻想建築コレクション（1）

大平桂一

これから何回かにわたって中国史上不可思議な建築物を記録した文章をとりあげ訳出していく。その中には、(一) 実在したもの、(二) 実在したもののあつという間に撤去されたもの、(三) 実在せず、作者の頭の中だけに像をむすんでいたもの、(四) それどころか作者でさえもその建築物の実態をつかんでいなかったもの等、様々である。本稿は第一回として、明末の人董説が書いた「志園記」を取り上げたい。董説については、すでに「董説が見た夢の記録（一）」（女子大文学第四十六号）で紹介したので重複を避けるため詳しく述べないが、簡単に記しておく。董説は浙江省呉興の人で、明滅亡の直前、二十一歳にして『西遊記』を下敷きにした幻想小説『西遊補』（平凡社東洋文庫刊）を書き、二十三歳で夢日記『昭陽夢志』を刊刻し、明滅亡以降は経学・史学・音楽学など幅広い分野で興味にまかせて研究活動を行うと同時に、夢研究を継続、彼以外の人々の夢の記録を収集するための結社「夢社」を結成した。三十七歳で出家し、六十七歳でなくなった。「志園記」は、明滅亡から三年目の一六四七年に書かれた文章で、友人の虞聖民の庭園「志園」を記念するもの。さてこの志園は先に挙げた四つの分類のうち、どれに当てはまるだろうか、それは後のお楽しみ。

志園記

董説原著

大平桂一訳

「中国が苦しみだしてから、^{けんじょ}達士⁽¹⁾たちはみな夢郷⁽²⁾に帰った。夢郷の人には身体がなく、羽を動かさずに飛行する点は仙人に似ている。夢郷に沿って西の方角に^{ほんのうのうみ}苦海⁽³⁾を渡り、^{こころ}霊台⁽⁴⁾に登り、天竺国を望む、これを^{さと}旃檀⁽⁵⁾への近道と呼んでいる」これは私が書いた夢郷志の一節である。

癸未の年（崇禎十六年一六四三）、私はたびたび不思議な夢の旅に出かけ、